

[38] 新しい習字教育

「中国新聞」(昭和二十八年二月十九日)

連続「学校賞」をうけた熊野校

芸術としての「習字」

勉強も自由のびのびと

安芸郡熊野第一小学校は本社主催の学童生徒新年作品選装大会に昨年と本年の二回、習字の部で学校賞を獲得し注目されているが、そのかげには従来の毛筆習字教育から脱却して幅の広い芸術としての習字教育に乗り出した新しい方式への努力が輝いており、今や習字教育は筆の熊野町からとさえ定評づけられようとしている

終戦後、みるかげもなくなった毛筆習字は筆製造を業とするものが九割まで占めている熊野町にとっては大きな痛手で町民の首に綱がかけられたも同様の有様であった、そんな関係からその子弟をあずかる熊野校でも郷土産業に結びついた毛筆の不振は大きな問題であるので習字の新教育開拓に乗り出さずにはおれなくな

った

そのうえ児童たちにとっては、従来の教育は全く型にはめられた不自由なものであまり面白がらず、ここに型を破ったものが求められるようになった

そこで佐々木校長をはじめ滝口先生たちが数年の研究の末やっと二十五年ごろようやく連筆より用筆を先行させること、そして非常に活動的な児童をかた苦しい昔の毛筆習字教育から解放して能動的なものにする、という二点に着目実行に移すことになった、そして低学年は特別教科活動、高学年は絵とも字とも似つかぬ用筆からはじめられたのである

書かれた字は必ずしも楷書(かいしょ)ではなかったが、先生達は十種類に近い手本を個々の生徒の性格によってあたえ新教育を進めた

一年を経過した二十六年ごろには児童も自信が出てきて毛筆を手へのびのびと紙面に向った

その結果は用紙も表、裏の別なく自由に選び、姿勢も少しもちゅうちょすることなく自分のつごうのよいよ

うにあるいは立ってあるいはすわって書くほどになつた

習字に関心を持つ人たちがこの新教育下の熊野校を訪れると児童の自由な気持ちでかかれた作品に深い感銘を受け、必ずその作品をもらって帰るといふほどにまでなつてしまつた

そして各所の競書会や展覧会に出品した熊野校の作品は小学校児童の字として、これでいいのだらうかと疑問を持たれながらも見る人の心を打ち「よいから仕方ない」と優秀な成績を収めているそうだ

熊野校が毛筆習字の新教育を実行にうつした二年後、東京で開かれた習字教育研究会へ出席した山陰地方の指導者が東京から帰路、熊野校にわざわざ立ち寄つて、そのすばらしさに驚いて帰つたといふことなどもあり、全国のトップを進むものとされて、今年五月に開かれる習字教育研究会にも大きな期待が持たれてゐる

[39] 特産品工業の実態

「中国新聞」(昭和二十九年三月五日)

特産品工業の実態 熊野フデの巻

最盛期は毛筆だけで七千万本

戦後は画筆に新活路開く

筆の都、広島県安芸郡熊野町の毛筆製造は隣接の「カモジの町」矢野とともに、安芸郡が誇る郷土自慢の双壁であり、筆の名産地として全国にその名をはせていることは余りに有名である、最近の年間生産額は毛筆の四千万本、画筆二千万本で年間約五億円の水揚げをみ、全国生産高の八〇%強を占めている

最盛期の昭和十三年ごろには毛筆のみで年間七千万本を記録し、遠く満州、中国、台湾に販路が拡大し、業者はわが世の春をおう歌したが、終戦を機に学校習字が正課から消え、一般事務用の毛筆もすたれるにおよんで百年余の伝統産業も衰微の傾向を描き、一部の業者は苦境切抜策として同種の水彩画筆や化粧刷毛製造に道を切り開き、筆工たちもまた農業にクラ替えする

などの業界の苦難期に当面したが、業者が宿願の学校習字の正課復活陳情が幾分か奏功して、昭和二十六年には小学校四年以上と中学校での書方、習字が随意科目として編入をみ、町の書道塾や書方教室などの目覚ましい進出とまって往年とまではゆかずともここ二、三年來町内にもホノボノの明るい表情が漂い始めた

◆…ここ産地の特色は全町二千六百十余戸のうち筆作り專業が約五百戸、農家の副業が千二百余戸で、町全体が平面的工場の様相をおびていることで、特殊の職人を除いては全町民が筆作りに従事しているといわれる珍らしいケースの特産地を描き出している

ここの間屋筋は大口組が二、三十軒、中・小間屋の百軒余りでこのほかに原毛を使う毛屋間屋五軒、筆の軸専門の軸屋が四軒を数え、販路も全国に行き渡っているが、半製品のまま京都、奈良方面にも相当量が送り出され、昨年は奈良筋の大卸屋の倒産のトバッチリを受けて、某問屋のイモづるが青くなるなど、業界の浮き沈みが町の経済を敏感に反映させている

◆…ところで終戦後のどん底の不況をしのぐ手段として、選んだ画筆の売行きが本筋の毛筆の域に迫る好調ぶりを示してきたことで手工業の域を脱しない限り毛筆以上の販路が期待され、海外進出への飛躍的将来性が早くも一部業者筋で見通しづけられていることは伝統産業の大きな強味を温存しているといえよう

しかも製造工程が毛筆よりきわめて簡単であり、原料の原毛もブタ毛一色であることは、輸入原料に待たずとも国内確保も可能であることと、学習科目の図画が習字の随意科目に比べ正科にある強味などが指摘されている

◆…毛筆原料の原毛は国内では馬毛が北海道・東北方面で、軸は岡山・兵庫・宮崎の各県で確保されるが、良質のタヌキ、ジャコウ猫毛は、中国産が香港から正規ルートで順調に入ってくる

また画筆の軸は徳島県や三次（広島）から入手されている

海外からの引合は昨年シカゴやブラジルからあった

が、業界筋で直接取引を敬遠してご破算となったが「フデの王国」熊野町への関心が海外に高まりつつあることに業界筋では気をよくしている

◆…ともかく業者の宿願は往年の毛筆の活況を取り戻すため小、中学校の全学年の習字、書方の正科復活と高校、大学教養部の書道必修課目への編入であり、これに付随した書道科教員養成機関の拡充に絶えず陳情嘆願が繰り返されていることで、日本趣味復活による書道興隆への需要増が町民の見果てぬ夢の姿である

[40] 習字科独立の運動

「中国新聞」(昭和二十九年六月九日)

習字科独立に猛運動

熊野町の毛筆業者ら

全国生産額の八割強を一手で占め筆作りが生命の安芸郡熊野町では、六・三制実施後一時習字が正科から随意科に転落をみ、これが需要のガタ落ちで浮沈の岐路にさらされた、同業者らは必死で正課復活への猛運動

第五章 熊野筆関係資料

を続けた結果、二、三年前から再び毛筆習字は小学校四年から国語科の習字科として正課に復活、その後引続いて独立科の編入を陳情中であつたが、今十九国会に国語科から分離し、小学校四年から独立科に編入する請願が衆参両院ではじめて採決をみ、これに勢いを得て町当局および毛筆協組では全国書道連盟と共同で文部省に強力な運動を起すことになり城本町長ら代表が近く上京することになった

[41] 熊野筆と標準工賃制

「中国新聞」(昭和四十四年十月三十日)

熊野筆に標準工賃制

一日から家内労働の条件改善

県の特産、安芸郡熊野町を中心とする毛画筆の製造に従事する家内労働者の労働条件を改善するため、県書画筆事業協同組合(城本勝司理事長、八十人)は十一月一日からおもな品種について標準工賃制を実施する家内労働の標準工賃を決めた例はすでに全国で百二十

七業種あり、県下では被服縫製業に次いで二番目だが、同協組のものは工賃の最低額を明確して実効性をもたせた画期的なものである

標準工賃のおもなものは、毛筆の「穂首づくり」が百対（二百本）当たり二千九百円、穂首を軸につける「繰り込み」が同二百五十円、ノリ固め同三百三十円で、これまでの工賃に対して全品種工程平均で七・六％の引き上げとなっている、また工賃支払い日も、従来一カ月おきの精算払い制があったが、毎月一定の締め切り日を決めて十五日以内に払うことにし、さらに家内労働手帳制度の採用を促進して委託条件の明確化を図ることになっている

熊野町を中心にした毛画筆の生産は、毛筆が年約四千万本で全国生産のほぼ九割、画筆が年約八千万本で同六割を占めている、標準工賃制の適用を受ける家内労働者数は四千八百五人で、このうち熊野町が約三千三百六十人と大部分を占め、残りは周辺の安芸郡矢野、海田、船越、府中、熊野跡、瀬野川の六町村、呉、賀

茂郡黒瀬、八本松の各市町村にまたがっている、しかし県画筆協組の業者組織率は六七％でアウトサイダーが四十人おり、これが今後の一つの問題点

家内労働者には労働関係法規の適用がなく、労働条件や作業環境が一般に劣悪であるため、労働省は改善に乗り出しており、広島労働基準局にも広島地方家内労働対策協議会が設けられている、協議会はことし三月以来、家内労働者の多い毛画筆製造業を取り上げ、毛筆部会を設けて実態調査や対策を検討し、業界と話し合ってきた

業界でも経営合理化のため委託条件改善の機運があった、九日に標準工賃制の実施が最終的に決まった

[42] 炭ソ病患者

「中国新聞」(昭和四十七年七月八日)
炭ソ病の主婦死ぬ

毛筆作り中? 感染 広島県熊野町

過去七年間、全国でも発生したことがない炭ソ(痘)

病患者が広島県安芸郡熊野町で発見された、患者は六日夜死亡したが、伝染性の病気のため県衛生部は七日、海田保健所に患者宅の消毒などを指示した

患者は同町で毛筆業を営む三十四歳の主婦、一日、カゼに似た症状を伴って発熱したため、町内の医師に診察を受けたが、その後も熱が下がらず、四日、県共済病院に入院、検体培養の結果、炭ソ病と断定されて間もなくの六日夜死亡した、県衛生部は、毛筆の原材料についていた炭ソ菌が、患者の傷口から侵入したとみて、患者宅や感染源とみられる毛筆材料の消毒と、患者に接触した人の検査を海田保健所に指示、また念のため、手足に傷があったり、発熱した場合は、早めに診療を受けるよう、地元民に呼びかけている

同時に業者に対し、今後は毛筆材料の洗浄を徹底してやるよう保健所を通じて指示した、しかし、肝心の感染経路については、炭ソ菌が数十年間でも生き続けることなどから、調査は事実上不可能との見解を示している

炭ソ病は、伝染病予防法で届け出を義務付けられている伝染病

この病気で死亡した牛、羊などの肉を食べたり、毛、皮革に接触すると感染するが、人から人へは感染しにくい、死亡率は五%と低く、早期にペニシリンで治療すればほとんど完治する

[43] 伝統工芸士

「中国新聞」(昭和五十一年二月二十六日)

伝統工芸士に熊野筆の5人

【東京】伝統的工芸品産業振興協会(滋賀辰雄会長)は二十五日、日本の伝統美を保存するための技術を持つ二百三人を五十年度の伝統工芸士に認定した。県内の認定者は次の通り

【熊野筆】毛筆穂首【赤翼満寿彦(五五)、上馬場正生(五四)、実森盛登(五七)、徳田信雄(七八)、福垣内茂(五五)】

[44] 熊野筆振興事業

「中国新聞」(昭和五十一年四月二十二日)

近代化目指す熊野筆 広島県熊野町

振興事業スタート

後継者育成品質の改善

45億かけ7年計画

広島県安芸郡熊野筆事業協同組合(高本琢史理事長、百三十業者)は、通産省から伝統工芸品に指定された熊野筆の経営基盤を確立するため、後継者育成、品質維持、作業場改善など九項目、総額四十五億円にのぼる熊野筆振興事業七カ年計画を作成、四月からスタートした

同事業計画は伝統的工芸品産業の振興に関する法律に基づいて作成されたもので三月中旬、通産省から認可されたばかり、主な事業は①後継者の育成②品質の維持改善③作業場や倉庫の改善④品質統一マーク表示⑤筆会館の建設―など

後継者の育成では高齢者の自然減を補充するため、特に職人芸の必要な穂首、すげ込み、仕上げの三部門で年間三十人の後継者を育てる、予算は約二千万円、品質の維持改善については各二人位の筆司による技術講習会を月一回開くほか、有名書道家との懇談会、作品発表会など開く

作業場や倉庫の改善は同事業の柱で、ほとんどの事業所が作業場改築、倉庫の新設、冷暖房設備など厚生設備の拡充を図る、予算は約三十億円、また伝統工芸品に値する作品には国の定めた統一表示マークを表示する、表示できるのは検査委員会でパスしたものに限り、筆会館は五十三年度に建設が予定されており、鉄筋三階建て延べ五百平方メートル、総工費約一億円をかけ組合事務所、共同倉庫、集会所、展示場などにあてる

このほか原料を確保するため中国へ産地調査団を派遣したり、需要開拓のため市場調査や見本市の開催など行う

事業費のうち国、県が補助するのは後継者育成の講師代、材料費千六百万円だけで、残りは統一マークの売上金（約四億円）、政府系金融機関の特別融資でまかなう

熊野筆は年産四千二百万本で全国の九割を占め、売上高は三十八億円に達する、しかし九割近い事業所は五人未満の零細業者のうえ、後継者不足で抜本的な構造改善が迫られていた、それだけに同事業は今後の熊野筆の明暗を決するもので、組合では「現在原料の七〇%を中国に頼っているが、その中国が日本と同じ製法で製品を輸出する可能性もあり、この際業者の体質、製品の品質など徹底的に改善し国際的競争力を身につけたい」と意欲を燃やしている

[45] 郷土館開館

「中国新聞」(昭和五十二年十一月三日)

熊野筆こんな歩みで現在に

熊野 郷土館がオープン

第五章 熊野筆関係資料

「熊野筆」で知られる安芸郡熊野町に二日、毛筆関係資料をはじめ失われつつある暮らしの道具や農具など民俗資料を保存、展示する郷土館がオープンし、多数の参観者でにぎわった

町役場では□□年前まで造り酒屋だった木造二階建ての母屋と土蔵（延べ二百五十五平方メートル）を買収し、これまで県道沿いにあった建物を約三十メートル奥に移転、千二百四十万円（うち国庫補助四百万円）をかけて展示室や収納庫に改造したほか前庭を庭園化した。玄関わきには金輪車に積んだ木製の手押し消防ポンプやまといが並べられ、土間と土蔵には足踏みのおつき機やスキ、馬ぐわ、唐うす、もみすり機など農民が何十年もの間使ってきた泥や手あかのついた農具が収納されている、一階の毛筆コーナーには、長さ二メートルもある大筆や幕末の三筆の一人といわれた貫名菘翁が使用した約百十五年前の筆、クジャクの羽毛やタンポポの胞子で作った珍しい特殊筆など約五十種類の筆が展示され、さらに毛筆の製作工程がひと目でわかる

ように実物と写真が飾られている

また隣室には、あんどん、ランプ、糸車、時計、さおばかりなど生活用具や町内から出土した石器や弥生式土器、火なわ銃などが、ところ狭しと並んでいる

二階には古文書や古すずり、墨のほか有名書家の作品が飾られている

[46] 製筆の新技术

(一)

〔中国新聞〕(昭和五十七年六月十日)

筆作りに繊維技術導入―広島県熊野町―

若手経営者、福山織工試とタイアップ

脱脂、化学洗剤でOK―「毛もみ」の苦勞、

解消へ

【海田】繊維が筆に技術協力―、広島県安芸郡熊野町の筆業界で、若手経営者らが、広島県立福山繊維工業試験場(神立均場長)とタイアップし、筆の原料である毛の脱脂・染色工程への新技术導入で研究を進めて

いる、九日、開いた町と業界との懇談会で、町も研究施設の設置を検討する考えを明らかにするなど、伝統技術に支えられて来た地場産業が、異業種との交流で活性化へ取り組み始めた

技術開発を進めているのは、熊野筆事業協同組合(高本琢史理事長、五十五人)、馬やシカ、ヤギ、イタチ、猫など筆の原料である毛の脂肪やほこりなどを取り除き、縮れを伸ばす工程―毛も(揉)み―の合理化と、現在は技術集積がないため大阪などで加工している毛染め工程の技術習得を目的に、研究を進めている

毛もみ作業は、モミガラを毛にまぶし、一二〇度に熱してシカ皮にくるんでもむため、ほこりが出やすく筆作り作業の中では最も環境が悪い、このため繊維業界で羊毛の脂肪やほこりを化学洗剤などを使って大量に取り除いていることにヒントを得た、繊維工業試験場で実験した結果、化学洗剤や石灰水でも筆用の毛の脱脂が可能ことがわかり、今後、実用化に向けて研究することにした

染色も羊毛を染める技術が応用出来そう、同試験場では「業種は違っても材料が似ているので、理論的には繊維技術の応用は可能、筆の工程を分析しながら、協力していきたい」(田辺磐繊維化学部主任研究員)と話している

試験場のある福山市と熊野町が車で二時間近くもかかるため、青年部では九日、町や組合幹部を交えた懇談会を開き、町内に常設研究機関の開設を要望、町も前向きに検討することにした、向久保会長は「長年、勘と経験で筆を作ってきたので、われわれ自身、毛の本質を知らず技術改良が難しい、五年計画で新技術を導入し、出来れば脱脂工程の協業化に取り組みたい」と話している

同町の毛筆生産量は、年間三千七百万本(五十六年組合調べ)で、全国生産量の約八〇%を占めている、しかし、中国産の筆の輸入や筆型ペンの普及、学童の減少による学校需要の減少などで、ここ数年、生産量は毎年百万本以上減っている、中国産が大量に輸入さ

れた一昨年には、十業者が倒産した、このため、業界では後継者の育成や経営近代化策を急いでいる

(二)

「中国新聞」(昭和五十七年十一月三十日)

科学処理導入「毛もみ」ラクラク

熊野筆作り新時代

職人芸なじめぬ若者

伝統継承危ぶむ声も

手作り並み書き味

協同組合青年部が開発

手づくりの技を受け継ぐ広島県安芸郡熊野町の筆業界で、若手製筆家たちが科学処理による新しい筆作りの開発を進めている、勘と経験だけが頼りの伝統的な筆作りは、毛の脱脂をする「毛もみ」工程が欠かせず、灰にまみれる作業は若い後継者から嫌われがち、ところが、洗剤などで科学処理すれば簡単に脱脂できることがわかり、完成した試作品の評判も上々、筆作

り業界での技術革新は、(伝統技術や職人氣質を廃れさせかねないジレンマもかかえている

新しい筆作りの開発に取り組んでいるのは熊野筆事業協同組合の青年部(向久保健威会長、五十五人)、ことし四月、部内に熊野筆研究部を設け、五年計画で新しい技術の開発に乗り出した、広島県立福山繊維工業試験場ともタイアップして、初年度はまず脱脂工程を科学処理することを研究している

嫌われる灰まみれ

「毛もみ」は、筆の穂先の墨含みをよくするため、馬やヒツジ、イタチなどの原毛に付着した脂肪分を取り除き、同時に毛の縮れを伸ばす筆作りのポイントになる作業、モミ殻を焼いた灰を毛にまぶし、百度以上の熱を与えながらシカ皮にくるんでもむため、灰が室内に立ち込めるなど作業環境は悪い、このため、後継ぎを嫌がる若者が多い

しかも、毛もみの温度や時間などは勘だけが頼り、「熊野では親のそばで作業しながら技術を習得するの

が普通」(向久保会長)という業界内の職人氣質も、現代の若者の感覚には合わなくなっている

毛もみ工程の科学処理を考えた同組合青年部は、繊維業界が化学洗剤を使って羊毛の脂肪やほこりを除去しているのに着目、工業用の中性洗剤をはじめ、カセイソード、石灰など十種類以上の試薬で原毛の脱脂能力をチェック、そのデータを繊維工業試験場に送って分析してもらい、すでに有望な試薬を四種類に絞っている

こうした処理だと、原毛を薬品の溶液に浸すだけで簡単に脱脂でき、溶液の濃度や温度、原毛を浸す時間などの確立が可能、毛もみのような高度な職人芸も不要になり、省力化にもつながる、科学処理した筆を使った熊野高校書道科の堀内泰之教諭(二五)は「よく使い込まないと結論を出せないが、従来のものより科学処理された筆の方がむしろ書きやすい」と高く評価している

中国製と競争し烈

しかし、科学処理の導入は全国シェアの八割を占める熊野の筆作りにとっていいことづくめではなさそう、約百三十年の歴史を持つづくりの技術が一変しかねないからだ、その一方で、安い中国製毛筆との競争を勝ち抜くには、筆作りの近代化も急がれるというジレンマがある、伝統技術の継承面では、向久保会長も「不安はあるが、学童用など大衆向けは科学処理で、高級品は従来の方法で作れば技術を継承できるのでは」とみる

同組合青年部は、本年度中に科学処理法の実用化を目指し、来年度からは染色工程への新しい技術の導入に着手する予定、最終的には脱脂と染色工程を協業化する構想も持っている、筆作りの「長老」で作っている熊野筆伝統工芸士会（二十人）の実森盛登会長（六五）は「毛もみの仕事は非衛生的で、重労働、それだけに、科学処理の導入は作業環境面で朗報だが、昔ながらの技術も捨てがたい、それにしても、時代の流れを感じる」と話している

[47] 産毛筆（胎毛筆）

「日本経済新聞」（昭和五十九年一月五日）

縁起物「産毛筆」に人気、筆の町に活気

若者の筆離れや値段の安い中国筆の進出で国内産の消費が落ち込んでいるが、「筆の町」広島県安芸郡熊野町では、赤ちゃんの産毛で作った縁起物の筆や松、竹、梅の繊維で作った新しい筆が人気を呼んでいる

広島市の東十五キロの山あいにある熊野町は人口一万二千人、うち約二千人が筆作りにいそしみ、生産高は全国の約八十％、しかし四十六年の四千五百万本をピークに年々生産が減り、今では国産の約半値の中国筆に圧倒されている、知名度もいま一つのため、仲介業者を経て歴史の古い京都、奈良のブランドで市場へ出されている現状だ

そこへ舞い込んできたのが赤ちゃんの産毛の筆、これはヘソの緒に代わる赤ちゃんの誕生記念として昔から伝えられる「胎毛筆」、筆師が親類や知人に頼まれて作っていたが、いつの間にか市井に広がり「誕生記

念に」と注文が次々に舞い込むようになった、町の筆

事業組合もこの生産に本腰を入れ始めた

新生児の毛髪は絹のように滑らかで筆の穂先としては一級品といわれる、お値段は約一万円、心を込めた親身のサービスが受け、昨年は約四万本の注文があったという

一方、組合員のアイデアで最近、繊維質の多い松と竹を木づちでたたきほぐし、金ぐしですいて作った新しい筆を考案、さらに梅も加えて「松竹梅」の三本セットも試作した、まだ売り出したばかりだが「筆跡がかすれ、毛筆と違った雅趣がある」と書道家などに評判は上々だという

[48] 熊野高の芸術類型コース

(一)

「中国新聞」(昭和五十九年七月十日)

筆の町に「筆の文化」継承

広島県熊野高 芸術類型コース誕生

書道・美術みっちり

「伝統に活」…地元も期待

筆の主産地、広島県安芸郡熊野町にある熊野高校(畠川利彦校長、千二百二十三人)で今春、普通科に芸術類型(書道、美術両コース)が設けられた、この三日には初の授業公開、地域に開かれた特色ある学校づくりを目指す、全国でも珍しい同類型の内容や課題にふれてみた

心の教育を最優先

一期生は書道コースが三十三人で美術は七人、この類型は独立の学科ではなく、普通科に含まれ、入試や一年時の授業はすべて同じ、二年から希望者が両コースを選び、卒業まで八単位各領域の学習(週五時間)を加える

書道コースの内容は二年で書簡文や拓本とり、用具研究など、三年では仮名や書道史、古典研究と幅広い、また美術は彫塑を手始めに版画、クラフトデザインなどを修め、三年で油絵、イラストを学ぶ

かといって「美術の専門家を養成するのではない」と同校は力説する、類型の目的について畝川校長は「こんな時代だからこそ、芸術による心の教育を最重視する、次に筆が作る伝統文化の書道や美術の継承を図る、さらに多様化する生徒の志望にこたえて個性を伸ばし、筆の熊野町の地域に根づいた特色のある学校を」と四つの意義を強調する

授業は学区内中学校の先生ら三十人が見学した、書道は類型実現に努めた担任の堀内泰之先生がのし袋の正しい使い方を中心に指導、黙想に始まる授業で生徒たちはきちょうめんに筆を運ぶ、一見ツツパリ風が穏やかな文字を書いていた、美術は平賀紘治先生、こぢんまりした新設の陶芸教室で塑像の型の割り出し、ノミの先を真剣に見る目がさわやかだった

進路保障にも配慮

授業後、中学側の質問に対し同校長は「進路保障が課題、現状は進学と就職が半々、共通一次に不利にならない配慮もしている、就職では関連企業の開拓も必

要」と説明、また堀内先生は「全員が第一志望でコースを選んだ」と述べ、落ちこぼれコースを否定した生徒たちの意図は、専門職を目指す者もいるが、ほとんどは「就職に有利」とか「特技個性が生かせるから」、ある就職志望の女生徒は「ちょっと迷ったが、書道を選んでよかった、仕事で生かしたい」と意欲をみせる、見学の中学の先生たちは、進路に多少不安感を抱く人もいた、昨年まで地元の熊野東中にいた同郡海田町、海田中の大和昭二先生は「進路の問題はともかく、高校教育に欠かせないものが含まれていると思う、自信をもって生徒に勧める」と話す

町づくりの一環に

約百四十年の歴史をもつ熊野筆は、全国の筆生産の八〇%を占める、五十七年ごろ地元から、伝統的な市場産業の利を生かして熊野高に書道科の声が上がった、同校はすぐ案を練ったものの、いろんな制約もあって「当初は賛成論なし」と堀内先生、その後検討を重ねて普通科の芸術類型を決め、五十八年の生徒募集

からPRを始めた

もちろん、地元の期待は大きい、熊野筆事業協同組合の向久保健蔵青年部長は「類型は、書道を中心にした文化の町づくりの一環と考えている、伝統産業を支える知恵袋にもなあってほしい、側面から協力を惜しまない」とバックアップを約束

また同町の世良統彦教育長も「地元には戦後習字教育復活に努力した背景がある、だが、現状は中学で指導者不足、書道担当教師らでつくる町書写書道研究協議会の活動と併せ条件整備を図りたい、芸術類型の発足をテコに、文化創造の用具(筆)を作る誇りをもつて町づくりを、書道文化センターがぜひほしい、出事れば芸術系の大学も」と夢をぐんと広げる、それはともかく、芸術類型が生徒の個性を生かし、豊かな人間性のある教育を実現出来るかどうか、今後の取り組みが注目される

(二)

「中国新聞」(昭和六十一年二月二十八日)

さすが筆の町

初の作品展は書が大平

熊野高の芸術コース一期生

安芸郡熊野町の県立熊野高校(畝川利彦校長)の芸術類型(美術、書道コース)を初めて卒業する生徒たちの作品展が、熊野町公民館のロビーなどで開かれている、五日まで

熊野高校は五十九年四月、二年生から芸術コースを設け、今年初めて三十九人が卒業する、県立高校で芸術コースがあるのは県内では熊野高校だけ、熊野町は日本一の筆の産地だけに書道コースを選んだ生徒が多く、会場には三年生の作品を中心に書七十点、絵画と焼き物などの工芸作品三十点ずつを展示している

校外で、生徒たちの作品展を開くのは初めて、畝川校長は「見事な成長ぶりをうかがわせる作品ばかり、生徒たちの励みになればうれしい」と話している

[49] ふるさと経済熊野町

「中国新聞」(昭和六十年五月十八日)

中国産の筆が脅威に

芸南山地のほぼ中央部に位置する標高二二二・五メートルの盆地、製造業など第二次産業就労者が全体の約五三%と大きなウェートを占めている、なかでも五十年に通産大臣から指定を受けた伝統工芸品の「熊野筆」作りは有名で、全国市場で八五%のシェアを持ち評価を得てきた、五十九年度は熊野筆事業協同組合の百三十八社で年間約一億本、書道用筆五十五億円、画筆二十億円、化粧用筆十五億円の総計九十億円の売り上げがあった

しかし、大口マーケットである学校習字も児童、生徒数の減少で落ち込むなど年間の総売上高はここ二、三年横バイ、画筆は、米国、ヨーロッパを中心とした輸出が年間約千六百万本と好調だが、急な消費拡大にはなっていない、また、化粧筆も流行に左右される商品なので、年によって売上高に差がある、最近是中国

からの筆が年間一千万本と大量に国内市場に進出ししており、新たな脅威となっている、この対策として組合では品質向上のための研究開発、販路を拡大するためPR方法の研究などに力を入れている

農業では、三十五、六年の全盛期には二十七ヘクタールの栽培面積を持ち、県内トップのモモの産地だったが、道路が整備され、広島の通勤圏内に入ったため労働力が流出するなどで衰退、モモ園は、宅地や山林に変わってしまった、町はこれまでに、ナス、タマネギ、キュウリなどの野菜を転作用として普及に努めたが定着しなかった、五十八年からは「丹波黒大豆」作りに取り組んでおり、県のふるさと一品運動として新しい特産品「筆豆」と名付けて売り出す

政令指定都市の広島市、工業都市の呉市、学園都市の東広島市に囲まれた地理的条件を生かし、筆づくりの観光化を要望する声もあり、町ではビデオテープや映画を制作し、PRに乗りだしている

[50] 熊野筆の現況

「日本経済新聞」(昭和六十年八月二十日)

『熊野筆』

ブランド浸透図る

ナイロン製も研究進む

ハイテク(高度先端技術)社会にあって、伝統産業の多くはひっそりと、しかし、たくましく生きつづけている、伝統技術を引き継ぎながらも、需要の変化に合わせた新技術、新商品の開発を進めるなど、たゆまぬ努力を積み重ねている、中国地方の主要な伝統産業について、新時代に生きぬく姿を探ってみた

熊野筆

広島県安芸郡熊野町は広島市から東へ二十キロ、芸南山地に囲まれた筆の里、全世帯の九割(副業を含む)が筆の生産に携わり、生産量は全国で使う筆の八割を占める、百年以上の伝統を誇る産地にも最近では、中国筆の攻勢などに対抗し、〃新しい伝統〃を築こうとす

る機運が芽生えている

「高級品は別として中国の筆は品質のバラつきが大きく現在では脅威でない、しかし、熊野町が輸入している獣毛の大半は中国産で、中国が技術を身につける将来は手ごわいライバルになる」と熊野筆事業協同組合の尺田徳太郎専務理事は話す

そこで浮上したのがナイロン筆のアイデア、組合では東レと共同で十年以上前から研究を始め、技術的なめどをつけた、毛先の擦れている獣毛と違いナイロン筆は毛先がそろっており、丈夫で長持ちするという、やっかいな静電気の問題も化学処理で解決した

ただ当面、ナイロン筆が主役になることはなさそう、「獣毛の供給に問題はないし、ナイロン筆を機械生産すれば町内四千五百人の仕事を奪うことになる、むしろ現在の技術を磨いて産地ブランドの浸透を図るのが先決」(尺田専務理事)

産地ブランド確立の動きは昭和五十年に熊野筆が通産省指定の伝統的工芸品に選ばれてから活発化した、

それまでは奈良などの間屋ブランドで売られることが多く、生産量の割に知名度はいまひとつだった、しかし、最近では展示会などでも「熊野筆」と指名するお客さんが増えており、産地では一段と熊野ブランドの普及に力を入れ付加価値を高めることにしている

熊野町は終戦直後、学制改革による習字授業廃止の試練を画筆と化粧ブラシへの進出で乗り切っている、磨き抜いた技術力への自信と柔軟な発想で、今後とも熊野小唄が「へ筆の都よ くまののまちは」と歌うように日本一の筆産地として発展するのは間違いない
年産三千七百万本

熊野筆の発祥は、江戸後期、浅野藩の御用筆司か町民が有馬（兵庫県）から制法を学んだとする説がある、耕地の少ない熊野町では奈良地方へ仕事に出る町民が多く、帰国時には筆や墨を仕入れ、行商して歩くなど毛筆業発展の素地があった、現在、年産は三千七百万本（六十五億円）、このほか画筆五千万本（二十五億円）、化粧ブラシ四千万本（十億円）を生産する

[51] 毛筆産地熊野町

「日本経済新聞」（昭和六十年十二月三十日）

経済ルポ

先細る毛筆産地 広島県熊野町

筆ペンに食われる

中国からの輸入も脅威

日本最大の毛筆産地、広島県の熊野町にとって、あまりありがたくない正月がやってくる、ライバルの筆ペンを使って書いた年賀状がめっきりと増えたからだ、伝統的工芸品産業の指定を受けて出直しを狙ったのは十年前だが、中国の輸入品にも押されて、生産はいっこうに増えない、あげくに、筆ペンの下請けをしなければならぬはめに追い込まれ、毛筆産地は先細る一方だ

筆ペン穂先を下請け

「筆ペンが登場するまでは、この時期はどの業者も目が回るほど忙しかったものでしたが、今ではさっぱりです」年も押し迫った十二月、熊野筆事業協同組合

の尺田徳太郎専務理事は言った

筆ペンが市場に出回り出したのは五、六年前のこと、「当時は毛筆の敵ではないと安心していた」と尺田さんは振り返る、初期の筆ペンはフェルトやゴムを使っていたため、書きごこちは筆には遠く及ばなかったからだ

ところが最近、本物の毛とナイロンを混ぜ合わせ、カートリッジ式のインキで書く筆ペンが登場、毛筆の感触にぐっと近くなった、組合の推定では、年間三百万本は売れているという、熊野町の毛筆の生産量は年三千六百万本で、全国の八割のシェアを持つが、筆ペンに一割ほど食われている勘定だ

地元大手、一休園の久保田玄一社長は「筆ペンを買うのはもともと毛筆とはなじみが薄い人たち、学童や書道家までさらわれるわけではない」と強気だが、「年賀状向けの需要をとられたのは確かに痛い」ともらす

皮肉なことに、その筆ペンの穂先は、実は大半が熊

野町製、地元の毛筆業者が下請けになって作っているからだ、どの業者がどれくらい引き受けているかは、組合もはっきりとはつかんでいないが、毛を使った穂先を作れる業者は熊野町にしかないから、地元では自明の事実になっている

「人口二万五千人のうち、三千五百人が筆づくりにかかっている、この人たちの生活を守るには、どの業者も仕事を減らすわけにはいかない、穂先の下請けはライバルの片棒を担ぐようなものかもしれないが、熊野の業者が引き受けないと、中国に持っていかれるだけ、やむを得ないんです」と組合の高本琢史理事長は説明する

効果薄い伝産指定

その中国も、いまや強敵のひとつだ、日中の国交回復以来、唐筆と呼ばれる中国製の毛筆が日本にもはいつてきて、現在の輸入量は年間一千二百万本、漢字専用にできている唐筆はかな文字を書きにくいことから、一時は輸入量が年間八百万本程度に落ちたりした

が、最近では再び一千万本台に盛り返した、中国側は日本の消費者向けに製造技術を改良したのだ

伝統的工芸品の指定によるテコ入れも、指定から十年たって色あせてきた、「振興事業によって、八年間で約七十人の後継者の卵を獲得したけど、この程度では焼け石に水」と高本理事長、筆ペンや唐筆などライバルが登場したこともあって、肝心の生産量の増加にはつながらなかった

大きな見込み違いもあった、伝統的工芸品の認定を受ける、伝統的工芸品マークをはって出荷できる、このマークはいわば国のお墨付きで、市場での競争力がアップする、しかし、高本理事長は「マークはまったく逆効果だった」と言う

マークを印刷したシールは一枚十円、筆にはる手間を考えると、コストは一枚十四、五円、それを文具店や卸業者に持っていくと、「マーク付きでなくていいから、同じものをシール代分安くして持ってきてくれ」と言われてしまった

組合はマーク付きの筆を年間八百万本は出荷できると考えていた、シール一枚十円のうち五円は組合の収入になるので、組合は年に四千万円もうかるはずだった、PRなどいろんな事業に使えると思っていたが、実際に出荷できたのは初年度でも十万本、最近では三万本程度にしかなくなってない、せっかくのマークも、流通段階では「流通」するだけの威力はなかったわけだ

学童向けも前途多難

最大の市場である学童向けも思わしくなくなり出した、学校の習字の時間が減りそうになったからだ、今年九月に発足した文部省の教育課程審議会は六十三年春に新しい学習指導要領を答申することになっているが、「コンピュータ化が進むにつれ、習字より算数や理科を強化すべきだ」という教育関係者がふえてきた」と尺田専務は不安そうだ

習字教育の動向と熊野筆の生産量は密接にからみあっている、戦前の昭和十一年には、熊野筆は過去最大

II 資料編

の七千万本を生産した、しかし、戦後、二十二年の学制改革で習字が廃止になったとたん、一千五百万本にまで落ち込んだ

その後は徐々に見直され、三十三年に小学校の判断で採用できる選択科目として復活、四十六年からは必修科目になり、三年生以上に年二十時間教えることになった、この年は四千万本を生産し、戦後最高を記録した、この先、習字が廃止になったりしたら産地には致命的だが、形勢は悪い

携帯用のワードプロセッサが一般家庭にも普及し始め、毛筆に限らず筆記具は全体として旗色が良くない、毛筆の書体で印字するあて名書き用のパソコンソフトまで登場して、毛筆の出番は今後ますます減りそうだが、伝産指定による国の後押しも五十八年度で終わり、産地はいま、自力で踏んばる以外にない